

9. *C. caryotideum* (WALL.) PR. (99) ヤブソテツ

支那、西藏、印度、東京、臺灣、日本、比律賓、布哇

f. *attenuata* (MOORE) CHING, comb. nov. (101) 支那f. *hastosum* (CHRIST) CHING, comb. nov. (101) 支那10. *C. urophyllum* CHING, sp. nov. (101) 支那11. *C. Fortunei* J. Sm. (102) ヤブソテツ 支那、日本、朝鮮、東京f. *polypterum* (DIELS) CHING (104) 支那、東京f. *latipinna* CHING (104) ヤマヤブソテツ 支那、日本f. *intermedia* (TAGAWA) CHING, comb. nov. (105) ミヤコヤブソテツ 日本12. *C. micropterum* (KZE.) CHING 印度、亞弗利加

誤植の非常に多いのは遺憾である。ヒロハヤブソテツの學名は *C. macrophyllum* (MAKINO) TAGAWAの方がよいと思ふ。日本の種類は全部支那と共通であるので、支那の種類が明になるまでは十分な研究が不可能であつた。抄録者とは多少意見の異なるところもあるから、日本の種類は今一度研究しなほしてみやう。(田川基二)

吳印禪氏：**ムベ屬植物**：G. C. Wu, Über die Gattung *Stauntonia* DC., in Notizbl. Bot. Gart. Mus. Berl.-Dahl., Bd. XIII (Dec. 1936) pp. 364-376.

氏はまづ本屬を花瓣のある亞屬 *Parvatia* (DECNE.) WU とない亞屬 *Eustauntonia* WU とに區別し次に檢索表及び各種の Synonymy, 簡単な記相文及分布を述べて居る。氏は本屬に十七種を認めて居るがその内本邦にも分布して居る植物は次の通りである。

S. hexaphylla (THUNB.) DECNE. ムベ., f. *typica* WU (日本. 廣東省), f. *rotundata* WU (日本. 台灣), f. *ovata* WU (日本), f. *obovata* WU (= *S. obovatifoliola* HAYATA) (日本. 台灣), f. *urophylla* (HANDEL-MAZZ.) WU (廣東省), f. *intermedia* WU (廣東省) の諸品種に分類される。

S. keitaoensis HAYATA (台灣) ケイタオトキハアケビ。

S. hebandra HAYATA (台灣). マルバトキハアケビ. var. *angustata* WU (台灣)

S. formosana HAYATA (台灣) タイワンアケビ。(大井次三郎)

シヤパレンコ氏：一公孫樹の最も近き祖先 (K. K. SHAPARENKO, The Nearest Ancestors of *Ginkgo biloba* L. in *Flora et Systematica* II (1936) pp. 5-32), 一露文一英文の Résumé あり。

この研究は公孫樹の古生物學的研究であつて Adzharistan の生きた公孫樹の葉の形態的觀察と古生物學的記録とに依つて過去の公孫樹を論じたものである。多數の地圖と葉の寫眞が挿入されてゐる。

著者の述ぶるところは、*Ginkgo adiantoides* と *Ginkgo biloba* とは別種として取り扱

つてゐるが同じ種であると考へると云ふ、兎に角 *G. biloba* は *G. adiantoides* の直系であると云ふ。銀杏の葉の形態的研究によつて銀杏は Biogenetic principle に従つたと考へる。若木の葉は深く裂けて葉低が長くなり化石 *Baiera* に似るが老樹の葉は浅く裂け葉低は腎臓形である。化石の *G. adiantoides* とそれに近縁の種も同じ變異をあらわす、古い地層の化石は深く裂けた狭い葉である率が若い地層の化石よりも多い。銀杏屬の各種を觀察すればすべての古い種の葉はより深く裂けてゐる。*Ginkgoales* に於ける他屬と銀杏屬に就いても其の起源の古いもの程身は狭く絲狀である。この考へに依つて異なる種として書かれた銀杏の種のあるものを *Ginkgo adianthoides* (UNG.) em. SHAP. (p. 18) に含めた、(p. 18 に表あり)。*Ginkgo adianthoides* のすべての發見された化石を年代順にならべてある。KÖPPEN-WEGENER 説の乾燥地と氣候帯の分布で説明してゐる。最古の化石は Angarida の侏羅層にあるが WEGENER に依れば大体 40° I. にあつたと云ふ。これは現在公孫樹の半野生狀に生育してゐる同じ緯度である。白堊期には *G. adiantoides* はロシアの極東、グリーンランドと北米にあり緯度の法則に合する。第三期には *G. adiantoides* は最初を中心とロシアの極東にありアメリカに於てはもつと北に向ふ、これは WEGENER に依るこの時代に起つた氣候の變化によく一致する。

中新期には氣候が寒くなつて *G. adiantoides* は南に移住した。然し北米では ミシシッピの平原でさえぎられ北米には絶えた。歐州の地中海地方では乾燥が甚しくなつて第三期の植物は亡びた。それで歐州ではごく一小部分にのみ *G. adiantoides* が残つた。アジアの西部でも同じ様な状態であつた。コーカサス。パミール、天山山系、アルタイの氷河の沖積平原は第四期に於て *G. adiantoides* の移動の障害となつた、そして亡びた。東部シベリアに於ては氷の包んだ地域が歐州や西部アジアほど廣くなく形状と海の影響により暖かで濕氣に富んでゐた。こんな状態は第四期を通じて銀杏が生残るのに好都合で、*G. adiantoides* の第四期の化石がアジアの東部から發見された。この地帯ではもつと寒くなる以前に廣く分布し南の方へ移動したであらうと思はれる。尙又こゝでは氣候の變化が少なく、銀杏が生存しつゞけた、然しながら人間がこれを栽培しなかつたなれば滅亡したであらうと思はれる。最後に著者は銀杏の分布と *Cycadean* と *Conifer* の分布を比較した。(北村四郎)

遠藤誠道氏：— 滿洲吉林省顧鄉屯産化石胡桃、第一次滿蒙學術調査研究團報告、第二部、第三編、第二號、(1936.) p. p. 1.-8, t. I. II.

滿洲吉林省の顧鄉屯 (Ku-hsiang-tung) は舊石器層に無數の化石を出したるを以て甚有名になつたが、著者は其中より胡桃の化石を報告したもので、マンシウクルミ